
光と闇のはざまに

織倉正美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇のはざまに

【Zコード】

Z8505Z

【作者名】

織倉正美

【あらすじ】

ファンタジーのボーイ・ミーツ・ガールものです。

神々の争いに巻き込まれる主人公とヒロインの運命を描いています。

「ネルセ・レアディ……おまえからからわざわざ俺を誘つてくれるなんて珍しいな。どういう心境の変化かな？」

そう言つて悪戯っぽく笑う黒髪黒瞳の青年を見返して、ネルセ・レアディは深々とため息をついた。

人選、いや神選を誤つたかもしれない……。

しかし協力してくれそうな神のうち、彼以上に力を持つ者はいないのだ。

「イフエ・ラディアス、あなたに頼みたいことがあるんだ。実は……」

「リ・スファノアの馬鹿野郎が、『気違いじみた』ことを企てるから、それを隠密裏に処理する手伝いをしてほしいっていうんだろ？」

みなまで言わせずネルセ・レアディの言葉を継いでみせて、その驚きの表情を楽しみながら、黒髪黒瞳の青年……イフエ・ラディアスは静かに笑つた。

「あなたは……知つてたのか……」

「俺は『耳がいい』からな……。たいていのことは知つてる。なんか、知りたいことがあつたら聞きにくるといい。おまえにならなんでも教えてやるよ」

「それなら話は早い……。彼の企ては危険だ。私に力を貸してほしい

い

「やだね

イフエ・ラディアスは、小馬鹿にしたように言つと意地悪く笑つた。

「そんな面倒なことを何で俺が手伝わなければならないんだ。そんなことはリ・セスティスにでも頼めばいい。あいつは真面目だし、おまえに惚れぬいてるから喜んで力を貸してくれるだろうよ」

できることならそうしている……。それができないから、じつ

て、こんなやつに頭を下げているのだ。

少年とも少女ともとれる、あるいはその両方でもない纖細な美貌を怒りにふるえさせながらも、ネルセ・レアディはつとめて平静に答える。

「セスティスに頼めばことは隠密裏ではすまなくなる。下手をすればすべての界を巻き込んだ戦乱になりかねない」

「確かに。あいつは真面目だけど融通なんてものは全く利かない石頭だからな。少なくともスマーノアの阿呆に決闘を挑むくらいのことはやってのけるだらうな」

神同士の決闘！？ それだけでも界のひとつやふたつに、致命的な天変地異を起こしかねない。

「解っているのならふざけないでくれ！ こんなことを頼めるのはあなたしかいないんだ。だから……」

「なかなか頼み方がうまいじゃないか。確かに俺が協力すれば、あいつの企てを隠密裏に葬り去ることも可能だらうな。まあ、おまえがそこまで言うなら引き受けてやらん」ともないが……

ネルセ・レアディは相手の言わんとすることを察し仏頂面で言葉を継ぐ。

「条件次第つてワケか」

「そういうことだ……条件といつてもたいしたことじやない。おまえ、もう何か策は立ててあるのか？」

イフエ・ラディアスの問いに、ネルセ・レアディはぐつと言葉を詰まらせる。

何も考え方なかつたからこそ助力を求めて来たのだ、なんて言えない。

「そんなことだらうと思ったよ。まあそれならちゅうじいい。俺の条件はただひとつ、この件の処理に関して俺に立てた策に従つこと、それだけだ」

イフエ・ラディアスの意外な言葉に、ネルセ・レアディは思わず怒りを忘れて問いかける。

「何か、いい策があるのか！」

「ああ……とつておきのがな。おまえはただ、自らの力のかけらをふたつ用意すればいい。核に使うだけだから、それほど大きなものでなくてもかまわん。それさえ用意してくれれば、後はこっちですべてけりをつけてやる。どうだ？ そちらにとつてもかなりいい条件じゃないか？ 我ながら気前のいいことだと思うがな……」

確かにいい条件だ。かけらを渡すのは危険だが、小さい物がふたつ程度なら、悪用するにしても、たいしたことはできないはずだ。だが、あまりに話がうますぎる。何か裏があるに違いない。

「私のかけらをふたつ……それを核にしていつたい何に使うんだ？」
「媒介に使うのさ。それを利用して奴の崩そうとしている均衡を支えようつてわけだ。残念ながら属性の違う俺の力を奴に気付かれずに送るには、それが必要なんでな」

「なるほど。私の力をつかつて自分の勢力範囲を広げようつて魂胆だな。そのついでに均衡も支えてくれるつてわけだ」

「御名答……まどろつこしいけど、それが一番いい方法だろう。違うか？」

つまりは以前からネルセ・レアディが助力を申し出るのを予想していて、それを利用することを考えていたに違いない。

最初から引き受けるつもりでいながら、こちらをからかつていたのだ。

しかし、そういうことなら逆に信用してよさそうだ。イフェ・ラディアスは食えないヤツだが、少なくとも自らの利益がからむ時は、約束を破つたことはない。

「わかった。かけらは明日までに用意する。目的を果たせるのなら好きなようにつかつてくれ」

「オーケー。これで契約成立だな。まあ適当に期待して待つてくれ」

そう言つたイフェ・ラディアスの瞳が、一瞬、悪戯っぽく光つたことに、ネルセ・レアディは気付かなかつた。

下弦の遅い月が、地平線から顔をのぞかせた。

月光は淡い。

しかしその淡い月光は、ふたりの姿を追跡者へと示した。追跡者の長は狡猾な笑いを浮かべると、部下に合図を送り、巧妙に退路をふさがせる。

そして自分は、ゆっくりとふたりの方へと向かつた。

「姫君……ここまでですな。あなたは裁きを受けねばなりません。その邪悪な闇の使徒とともに、偉大なる光神へ、その汚れた魂を捧げなさい。されば、あなたの罪は浄化され、再び光のもとへと還ることができます。姫君……神は慈悲深い。あなたのように汚れきった存在でさえ救つてくださるのです。さあ、その邪悪な闇の使徒を神へと差し出しなさい」

「この子は……ルアークは私の息子です。そしての方の……私を救つてくれたあのひとの息子です。この子は渡しません。たとえ魂が滅びても、私はこの子を護ります」

姫と呼ばれた、まだ年若い美しい女性が、決然と言い放ち、我が身を盾にして息子をかばう。

「どうやら完全に魔に魅入られてしまっているようですね。自ら神のもとへ赴く気がないのなら、私が送つてさしあげましそう。まあ姫君。浄化の光に導かれ、神のもとへと旅立ちなさい！」

追跡者の長はそう言つて、手に持つていた宝玉を掲げた。

その一瞬後、宝玉は目が眩むほどの閃光と化し、光の奔流となつて母子を襲う。

「くつ……」

浄化の光などではない。破壊と殺戮の光がふたりを包みこもうとした瞬間、辛うじて間に合つた防御結界が、何とか光を押しとどめる。

「ほほう……さすがはかつて、巫女王の後継最有力候補だつただけのことはありますね。しかし、これではどうですか？……そうれ」

そう言つと男は、輝く宝玉を虚空へ放り投げた。

宙に浮かんだ宝玉から、さらに光がほとばしり、ふたりに殺到する。

だめ……このままでは……。

結界は、もうごくらも持ちそうにない。覚悟を決めるときが来たようだ。

何としても……この子だけは、助ける！

彼女は心を決めると結界を解除し、自ら光の奔流へと身を投げた。全身を光に焦かれながら、その光の魔力を取り込み、息子へと集中させる。

「母上！」

息子の悲痛な叫びを耳にしながら、彼女は転移の呪法を完結させた。

生きて……ルアーク。

「ははうえー！」

ルアークの絶叫が響き、彼がいざこへかと消えた瞬間、光がすべてを舐め尽くす。

そして……虚無があたりを支配した。

何かに操られながら、フィルデラは進んだ。

封邪の間。

その凝縮された力はどのような存在でも捕らえ、自由を奪うこと
が出来る。

フィルデラは無意識のうちに扉を開くと、その恐るべき牢獄に捕
らえられた哀れな生物と対した。

「私を呼んだのはあなたなの？」

本来はこの程度の力に縛られる彼女ではない。

操られるように行動しながらも、フィルデラは自らの意識を失つ
てしまいなかつた。

その導きの力が持つていた悲痛な願いを察して、自ら操られたの
だ。

導きの力の主……暗黒竜もそれを理解したのだろう。フィルデラ
の質問に肯定とともに感謝の意志を含ませて答えた。

「何がお望みなの？……逃がしてあげることはできないけれど、
それ以外で私にできることなら、かなえてあげられるかもしれない
わ」

フィルデラは慎重に言葉を紡いだ。

「この生物は邪悪なものだ。いや、そうであるはずだ。

しかし、この生物と実際に意識をふれあわせてみて、この生物が
自分が今まで思っていたような邪悪な存在では決してないと、フィ
ルデラは感じた。

だが、気を許すべきではない。

もしかしたら、この生物が真に邪悪な存在であるがために、フィ
ルデラの感覚がごまかされているのかもしれないのだ。

そのフィルデラの疑心が伝わったのか、その生物は苦笑したよ
うな心理イメージを発した。

逃げるつもりはない……。逃げようとしてもそれだけの力が自分にはもう無い。

その心理イメージから、彼が　いやこの竜は女性だ　彼女が既に、肉体も精神も、ぼろぼろに傷つけられていることを理解して、フィルデラは怒りを感じた。

彼女がまだ生きていらるのは、この封邪の間の持つ、強力な呪縛のためでしかない。

この残酷な呪縛は、捕らえた生物にたいして、死による開放さえ許さないのだ。

この邪悪な生き物は浄化され、汚れなき魂へと昇華をせられるために捕らえられたのではなかつたのか？

少なくとも、このよつた残酷な責めを受けるためでは無かつたはずだ。

たとえ彼女が真に邪悪な存在であつたとしても、これは許されることではない。

「だが……だが、あなたにこんなことをしたの？」

フィルデラは知らなかつた。この質問が、自らの運命を変えたことを。

黒竜は思念を返した。

おおきな、おおきな存在。光に満ちた存在。それが私を傷つけ、魂を食らうのだと。

光り輝く、巨大なイメージ。

その存在のことをフィルデラは知つていた。それは、神。

少なくともほんの少し以前までは、フィルデラにとつてそれは偉大なる正しき神だつた。

そう……ついさつときまでは。

真実が静かにフィルデラの意識の中に染み込んでいく。

彼は確かに神以外の何者でもない。

しかし、彼は本当に正しいのだろうか？

彼の無謬を信じた自分は本当に正しかったのだろうか？

光に満ちてていること＝正義。

暗黒＝邪悪。

この等式は本当に成り立つのだろうか？
これまでに幾度となく感じていた疑問。

その解答がここにあった。

フィルデラの中で、何かが音を立てて崩れていぐ。
信じたかった……。信じていたかった。

神の正しさを、そして、自らの正しさを。

しかし……フィルデラにとって正しかった神は、この竜にとって
は邪悪な忌むべき存在なのだ。

真に正しきものなどあり得ない。

それは神においても例外ではないのだ。

真実を知った以上、フィルデラには直りを「まかす」とは許され
ない。

もう何も知らなかつたころには戻れない。

フィルデラには、神が、そして自分達が、完全な正義であると、
もう信じることができなかつたのだ。

心は、決まった。

「あなたに力を貸すわ……なにを私に求めているのか、教えて」
竜が小さくうなづくと、虚空に突然、ごぶし大の黒い物体が現れ
た。

フィルデラは、胸にそれを受け止める。

この子を、お願いします……。

必死になつて神から隠していたのである。命を削つて造りあげ
た結界の中に、彼女は卵を隠していたのだ。

「必ず……必ず護つてあげる。だから安心して」

そう、問いかけてフィルデラは、彼女の魂には、もう返答を返す
力も残つていないと気が付いた。

「あなたの想い……必ずこの子に伝えてあげるわ」

あふれ出る涙をぬぐおうともせず、ファイルテラは決然として、この残酷な牢獄を後にした。

新月の闇の中、この光の神殿には彼以外に動くものはない。

今日を選んで正解だつたな……。

光神殿に仕えるものにとつて、今夜は禁忌の夜。何人たりともも出歩くことは許されない。

普段なら、潜入することなどどうてい不可能なここも、この夜だけは何となるかもしない。

そう思つて、あせる気持ちを抑えて時を待つたのは、正解だつたようだ。

失敗は許されないからな……。

大切な……大切な、存在。

今、こうしてここに自分があるのは彼女のおかげなのだ。

母を失つた自分をここまで育ててくれた彼女。

もうこれ以上、自分にとつて大切な存在を失うのはごめんだった。

……見つけた

さすがに光神殿の総本山だけあって、その結界の堅固さは並みたいていではなく、これまで彼女の気配をつかむことさえできなかつた。

だが、やつとそれが見つかった。ルアークは安堵に小さくため息をついた。

いや……まだ本番はこれからだ。

ルアークは緩んだ気を引き締め、広い神殿の中を、気配を消しながら慎重に進んだ。

ここを……左。

術で探るが何もないようだ。

よし……。

ところが、そこを左折すると、突然目の前に人影が現れたのである。

しまつた……待ち伏せか！

恐慌に陥りそうになる自分の心を叱咤し、目の前の人影を見極める。

金色の髪、同じく、金色の瞳。

闇のなかにあっても輝くような美しい少女が、驚きに目を見はつてこちらを見ている。

まずい……！

ルアークは、今にも悲鳴をあげそうな彼女の口をすばやくふせぐと、耳元に小さくささやいた。

「叫ぶな……騒ぎになつたら、それもやばいんじゃないのか？」

今夜は禁忌の夜。

巫女であるらしいこの少女が出来くじとは、絶対許されないはずなのだ。

その予想は当たつた。

恐慌に陥りかけたらしい少女は、すぐに冷静さを取り戻し、小さくうなずいたのだ。

「あなたは誰？……ここには、何しに来たのですか？」

たずねる少女の首筋に、ルアークは短剣を突きつける。

「おまえにたずねる権利はない……。こちらの言つことに従つてもらおう」

ルアークが、できるだけ冷たい口調でそう言つたが、少女はひるまない。

「もしかして……あなたは、盗賊さん……ですか？」

いちいち盗賊まで“さん”付けで呼ぶところが、この少女の育ちの良さを示しているのだろうか？

「ああ……似たようなものだな」

毒氣を抜かれて慄然とした表情で答えたルアークに、少女はにっこりと微笑みかける。

「あの……それでしたらお仕事のついでに、私をここから連れ出してはもらえないでしょうか？ あつ、もちろんその代わりにお仕事を手伝わせていただきます。私、宝物の管理係をしてたことがありますから、宝物庫なら御案内できます」

可愛い顔をしてるのに可哀想に……。ちゅうと頭が弱いのだろうか？

まあ、せつかく手伝ってくれるって言つたのだから、せいぜい利用させてもらおう。

ルアークは一抹の不安を感じながらも、うなずいて、少女に肯定の意を示した。

「よかつた……」口を出ことに決めたものの、どうやって結界を抜けようか、途方にくれてた所だつたんです。盗賊さん……ようじくお願ひします

そう言って、嬉しそうに微笑む相手に、短剣を突きつけてるのが馬鹿らしくなつて、ルアークはそれをふところにしまつた。

「こちらです……ついて来てください」

少女は、ルアークの肩を引っ張つて、宝物庫の方に案内しようとすると。

「いや……俺の目的は宝物じゃないんだ……。きみは、このあいだ捕まつた黒竜が、どこに捕えられているか知らないか？」

ルアークのその質問に、少女は驚いて目を見張つた。

「このひと……いつたい？」

いきなり目の前に彼が現れた時は、自分が神殿を抜けだそうとしているのが、ばれたのかと思つた。

だがよく見てみれば、現れた青年の髪は黒っぽい茶色、瞳は黒で、光の要素がほとんどなく、神官ではありえない。

次に、盗賊……だと思った。

だがこの青年　いや、よく見れば年は自分とそんなに違わなく、青年と呼ぶには若すぎる、かといって少年と呼ぶには大人びているは、宝物が目的ではないと述べ、さらには、あの、黒竜のことをたずねてきたのだ。

できるだけ感情を表すまいと抑えた表情に、必死の想いがにじみでている。

「このひと！　あの黒竜さんを、助けに来たんだわ！」

「あなたは……彼女のお知り合いなんですか？」

フィルデラの質問に、青年は思わず声をあげる。

「教えてくれ！　彼女は……エメラーカは無事なのか？　そして、どこに居るんだ……。教えてくれ！」

この青年にとつてあの竜は、本当に大切な存在なのだ。

彼の純粋な想いにうたれて、フィルデラは力なくうつむいた。

「の方は、エメラーカさんつておっしゃるんですね……。いま、彼女は封邪の間という場所にとらわれています」

「そうか……良かつた、無事だつたんだ……」

フィルデラの言葉に、青年は安堵の表情を浮かべた。

その嬉しそうな表情が、フィルデラの心をさらに暗くする。

どうすればいいのだろう……。

確かに、まだあの暗黒竜は生きている。だが、彼女を救うことはもう不可能だ。できるものならば、フィルデラが自分でやつている。その事実は、彼を打ちのめすだろう……。

だが、告げなくてはならない。フィルデラは悲痛な表情で、言葉を紡いだ。

「ですけど……彼女を救うのは不可能です。もう、彼女には逃げるのに耐えうる体力も、精神力もありません。肉体も魂も、神によつてぼろぼろにされてしまつてるんです。あんな……あんなひどいことつて……」

思い出すだけで目頭が熱くなる……。あんな状態になつても、彼女は全てをかけて、卵を護つたのだ。

「まさか……。うそだよな……？」「

青年の問いに、フィルデラはがぶりを振った。

「そんな……」

青年はがっくりと肩を落とし、力なく床に膝をついた。

握った拳を床に打ちつけ、きっとフィルデラを睨み付ける。

「エメラーグがいったい何をしたって言つんだ！ 邪悪な暗黒竜？ よくもそんなことが言える！ きさらみらが彼女の何を知つてているというんだ！ 光に満ちていれば何をしても正しいというのか？ 閻に属するものはみな、邪悪で、浄化されなければならないのか？ 平和に暮らしていた彼女を狩りたてて捕らえ、いたぶるのが正義の行いなのか？」

彼の怒りは正当だ……。

血を吐くような青年の言葉が、フィルデラの心を切り刻んだ。

「エメラーグの所へ案内しろ！ 封邪の間はどこにあるんだ！」「

青年がフィルデラの襟首をつかみ、搖さぶりながら問い合わせる。

「それはできません！」「

ぱしんっ……。

言い返したフィルデラを、青年の平手がおそつた。だが、フィルデラはひるまずにさらに言葉を継ぐ。

「今から封邪の間にいけば、神に知られないわけにはいきません……。これを見てください」

フィルデラは必死の表情でそう言つと、背負い袋をおろし、そのなかにあるもの……闇色の卵……を、青年に示した。

「こ……これは……」

「そうです……この子を護るために、エメラーグさんは、すべてをかけたんです……。私はこの子を彼女に託されました。私には、この子を安全に逃がす義務があります。たとえあなたにでも、この子を危険にさらすまねはさせません！」

「そう……か。そうだったのか……。エメラーグも……」

その闇色の卵は、青年の怒氣をうすれさせ、冷静な表情をとり戻

させた。

だが、その感情を抑えた表情のなかには、薄っぺらい表面的な怒りではなく、蒼く冷たい光を発しながら、その実、赤い炎の何倍もの熱を持つ紫炎のような、真実の怒りが存在するのをフィルデラは感じていた。

どんな経験が、人にこれだけの怒りをもたらすのだろう？

このひとに、これだけの怒りを抱かせるほどの仕打ちをしたのは、自分がこれまで信じてきた神なのだ。

私、本当になにも知らなかつたんだわ……。

そんな神に盲従してきたこれまでの自分を、フィルデラは心から恥じていた。

「危険をおかしてこいつを護つてくれたのに、殴つたりしてすまなかつたな。女に暴力をふるうなんて最低だ……。エメラーグに怒られちまう。とにかく、卵は預かろう。きみは巫女なんだろう？ 見つからないうちに、自分の部屋へ戻るといい」

自嘲してつぶやく青年に、フィルデラはかぶりを振る。

「いいえ……あなたの怒りは当然です。私は……私達はそれほど、ひどいことをしてきたんですから。知らなかつた、気付かなかつたで済まされることではないんです……。神は間違っています！ ですから、私は戻りません。この卵を托された以上、さつきも言ったように、私はこの子にたいして義務があるんです。私もあなたと同行します」

そう言つてフィルデラは、青年を真剣な表情で見つめた。

「本気……なのか？ 僕はおまえの信じる神に、敵対する組織に属しているんだぞ？」

念を押す青年に、フィルデラは迷うことなくうなずく。

「はい。あなたは、私が以前信じていた神の敵です」

フィルデラはそう言つて、にっこりと微笑む。

しかし、ルアークは、その笑顔の中に固い決意が秘められているのを知つた。

「わかつた……俺の名前はルアークといつ。よろしくな
「私は、フィルデラと申します……よろしくお願ひします……」
運命が……動き始めた。

わからない、娘だな……。

自分よりも真剣に宝物をあさるフィルデラを見て、ルアークは頭を抱えた。

「ルアークさん見てください……。この大きな紅玉を。これなら、高く売れますよね……。ひい、ふう、みい……七つありますから、ひとつくらい持つて行つても、ばれません。どうぞ……」

「あつ、ああ……」

うずらの卵ほどの大きさの紅玉を受け取つて、ルアークは力なく返事を返す。

あのあとすぐに脱出しようとしたルアークを、『ついでですから』と宝物庫に誘つたのはフィルデラの方なのだ。

しかも、『足がつくような品は困りますよね』などとおっしゃて、手際よく、持ち出す宝物の選別を始めたりなんかしたのだ。

こいつこそ、本物の盗賊なんじやないだろうな？

ルアークは、小さな巾着袋を取り出すると、フィルデラが選別した宝石を、その中に入れた。

「あれ……ルアークさん、もしかしてその袋は？」

「そう、『狭間の袋』さ」

『狭間』と呼ばれる世界の隙間とつながるこの袋は、みかけの何倍もの容量をもつてゐる。ルアークが取り出したその狭間の袋は、人ひとりくらいならなんとか収納できるくらいの容量を持つてゐた。『もう……そんな便利な物があるなら早くおっしゃつてください』いのに……。それがあるなら、持ち運びの利便のために、かさの少ない宝石だけを選ぶ必要はありませんから……。貸してください』

そう言つて袋をひつたくると、今度は食器棚の方にむかう。

銀や金、そして玻璃でできた高価そうな食器が、呆れるほどたくさん並んでいる。

フィルデラは、一種類の食器について数枚づつ、狭間の袋の中にしまいこんでいった。

「これぐらいでよろしいでしょうか？」ルアークさん……

よろしいでしようかも何も、一生、いや、十生は遊んで暮らせそうなほどの宝物が、すでに袋の中にはしまいこまれている。

「いいんじやないかい……。しかし、おまえ、宝物庫の管理係をしてたつて言つてたが、本当は宝物の横流しでもしてたんじやないだろうな？」

ルアークがそう言つと、フィルデラは首を振つた。

「いいえ……業務の一環として、宝物の売却を行つていたんです。私も、最初は知らなかつたんですけど、ある時、宝物の一部が減つていることに気がついて、テレシアさん……えつと、管理長をなさつている女神官です……にたずねたら、極秘のうちに必要な資金をそろえるために、裏のルートで売却する必要があつたんだつて教えられて……。それから私も、テレシアさんのお仕事を手伝つようになつたんです」

あの、それを横流しつて言つんじやないのでしょうか？

どう考へても、テレシアという人物に騙されていたとしか思えな

い。

しかし、あくまで真剣らしいフィルデラに、そのことを指摘するのは可哀想で、ルアークは頭を抱えながらも黙つていた。

本当に、おかしな娘だ……。

巫女らしく、純真な性格をしているのだが、その割には視野の狭さが無い。

世間知らずかと思えば、裏のルートでの取り引きなんていう、とんでもない知識を身につけていたりするし……。

なによりも、選ばれた者だという特権意識がないのだ。

これまでに出会った、貴族や神殿の特権階級達は、必ずその特権意識が腐臭を漂わせていた。

巫女などの中には、下層階級に優しく接する者もあつたが。それがあくまで、その特権意識に根差した、偽善的なお情けでしかなかつた。

そして、ほとんどの者は、その偽善的なお情けでさえ、持ち合わせていないのだ。

それに比べて、この少女はどうだろう？
特権意識に凝り固まることなく、物事を客観的に判断する、たぐいまれな能力を持つているのではないだろうか？

間違つていても思えば、今まで信じていた神をも批判し、横流し以外の何物でもない行為を、業務だと説明されてあつさり納得し、盗賊だと思った相手に、自分の身柄をまかせようとした……いや……やつぱりただのアホかも知れない……。

「ルアークさん、どうされました？ なんだか、おかげんがよろしくないようですけど……」

心底、心配そうな表情で自分を見るフィルデラに、ルアークの疲労は倍化した。

「いや……なんでもない……。とにかく、ここを脱出しよう……」「はい」

出会つたばかりの自分を、信じきった瞳で見つめながら返答するフィルデラに、ルアークは深々とため息をついた。幕間

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が闇つてたんだ……」

神殿の一角、宝物庫からそつ遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

「幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。

「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があつたんだ。“かけら”を送り込む以外に、

こんな手段が……

独り言を言うのがくせなのだろうか？ 幻像を眺めながらぶつぶつ言つ彼女は、ちょっと危なく見える……。

「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違つて、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立つていいんだけわ

今回の件に、妹 いや弟というべきか？ のレアディが関わっていたことは知つていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行つたものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴つていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかつた。そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘つたら、私が目をつけてた宝石、全部持つてつちやつて……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言つてひたつりと微笑んだ。

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関わってたんだ……」
神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。

「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があつたんだ。“かけら”を送り込む以外に、こんな手段が……」

「独り言を言うのがくせなのだろうか？ 幻像を眺めながらぶつぶつ言つ彼女は、ちょっと危なく見える……。」

「やつぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違つて、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立つているんだわ」

「今回の件に、妹 いや弟といふべきか？ のレアティが関わっていたことは知つていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行つたものを除けば、それはすべて、レアティの波長を伴つていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかつた。そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘つたら、私が目をつけてた宝石、全部持つてつちやつて……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言つてこいつと微笑んだ。

「早く……出たいなあ……」

暗くて、寒くて……。広いんだか狭いんだか良くわからない、その妖しげな空間の中で、フィルデラは心細げにつぶやいた。ここに入つてから、もう何時間もたつたような気がする一方、ほんの数分間しかたつてないような気もする。

時間の感覚がおかしくなつてゐる。

もしかしたら、この空間では外とは時のたち方が違うのだろうか？外での数分が、ここでは何十年にもなつたりして……。

冗談でそう思つたのだが、その考えはフィルデラの心をさらにおびえさせた。

結界を安全に越えるために、狭間の袋に入つてもらえないか？そうルアークに言われて、入つてみたのはいいが……。

「いやだ、もう……早く出たい！」

そう叫んだ瞬間、突然、胸と背中に手が押しあてられた。

「きやう！」

ぐい……。

その手は無造作にフィルデラの身体をつかみ、“外”へと釣り上げる。

“外”に出たフィルデラは、突然、地面の角度が変わつたせいで倒れそうになり、広い胸に抱きとめられた。

少年 この時のルアークの表情は子供っぽくて、少年と呼ぶにふさわしいものだった。は、フィルデラをしっかりと抱きとめながらも、偶然の起こした事態に思わず照れてうつむいた。

しかし、まだ両手は、フィルデラの身体 その胸と背中にしつかり添えられている。

ルアークに触れられている部分が、炎にあぶられるよつて熱い。

「ルアークさん……。手を、手を離してください……」

ファイルデラの言葉に、半ば放心状態におちいっていたルアークは、やつと自分を取り戻し、あわててファイルデラの身体を離した。

「ん……じめん」

「いいえ……」

ファイルデラの胸は早鐘をうち、全身が火が出るように熱い。

それは、これまでウワサにしか聞いたことのなかつた、恋の症状に酷似していく……。

まだ、出会つたばかりなのに……。

そう考えれば、今度は“一日惚れ”、といつ単語が頭に浮かんで来る。

ルアークはルアークで、何を思つてゐるのか、真つ赤になつてうつむいたきり、ひと言も話さないし……。

ふたりを氣まずい沈黙がおそつた。

テレシアが見ていれば、『もつ……ふたりとも、可愛いんだから

』つと思いつきり喜びそうな雰囲気である。

だが、当事者たる初心なふたりにとつては、『冗談ではない。

互いに“異性”を意識してしまつて、彼らとしては、照れてうつむくしか対処の方法がなかつた。

とにかく！ 今はこんな恋愛じつことをしてゐるヒマはないのだ。何とか心を落ち着かせて、話し掛けようとするが……。

「あの……」

「えーと……」

言葉をかけようとするタイミングさえばっちらり合つてしまつて、

また、ふたりとも照れてうつむいてしまつた。

そうやつて『ふたりの世界』にひたつていた彼らを、現実に引き戻したのは獣の気配だつた。

ルアークの顔がぱつと引き締まり、冷静な、大人びた表情に変化する。

そして、すばやい動きでファイルデラを後ろにかばうと、殺氣を發する獣に対した。

「光獣だな。行きには見掛けなかつたから油断していたが、やはり
こいつらには禁忌は関係なかつたか……」

光獣とは、種を問わず、光の要素を多く持つた獣のことを指す。
そして、巫女である自分達と同じく、神に選ばれた聖なる存在で
あると、フィルデラは教えてきた。

しかし、フィルデラにも解るその気配は、歪み、狂氣さえはらん
だ禍々しいものであつた。

ひい、ふう、みい。

三つの気配がふたりを伺つている。

それらは、うなり声も、吠え声もたてない。

この獣達には、侵入者を始末するために特殊な訓練がなされてい
るのだ。

フィルデラをかばうルアークには、隙が無い。

獣達も、攻めあぐねてゐるのか、まだおそつてはこない。
緊張が臨界点に達した瞬間。ルアークがふつと氣をぬいた。
引き絞られた矢が放たれるように、光獣がルアークに向かう。

「ルアークさん！」

その“三本の光の矢”に、ルアークが貫かれたような錯覚を感じ
て、フィルデラは思わず声をあげた。
だが、倒れたのはルアークではなく、三頭の光獣達だった。

勝負は一瞬。

一頭は短剣で眉間を突かれ、もう一頭は同じく短剣でのどをかき
切られ、そして、ルアークに達するかに見えた最後の一頭は、彼が
造り出した魔法の障壁に跳ね返されて、地面に転がつていて
にやり……。

さつきフィルデラの前で、照れてうつむいていたのと同一人物と
は思えない、凄惨な笑みを浮かべ、ルアークはまだ息のある最後の
一頭に歩み寄る。

くうくうん。

その光獣……どうやら犬だつたようだ……は、もうすでに戦意を

失い、哀れな鳴き声をたてている。

「やめて！」

殺しては……だめ！

しかし、その獣をかばおうと飛び出したフィルデラは、ルアークに力一杯突き飛ばされた。

「きやうつ」

したたかに腰を打ち付け、フィルデラは思わず悲鳴をあげる。

「ルアークさん……あなたは！」

突然、理解できない行動をとった相手を非難しようとしたフィルデラは、実は間違っていたのは自分であつたことに気がついた。光獣は戦意を失つてなどいなかつたのだ。

ルアークに突き飛ばされなければ、フィルデラは光獣に引き裂かれ、命を失つていただろう。

「芝居をうつとは、獣の分際で味なまねをしてくれる……」

そうひとりごち、ルアークは、倒れたフィルデラをかばうように、元気と対峙した。

重苦しい沈黙。

やがてそれにじれた光獣が、ルアークに飛び掛かった。

だが、対するルアークには先程のような、技の切れが無い。

くり出した短剣は、やすやすと獣にかわされてしまい、辛うじて間に合つた魔法の障壁で、獣の攻撃を防ぐ。

「くつ……」

その様子を見て取つて、獣はこじぞとばかりに、ルアークに連續攻撃をしかける。

反撃もできずに防御に徹したルアークが、少しづつ追い詰められていく。

ルアークさん！ ビうしたの？

「あつ……」

フィルデラは気付いた。ルアークは傷を負つてているのだ。肩口からななめにえぐられた、深い傷。

その傷のために、ルアークは本来の力を発することができないのだ。

あの時……自分をかばつて突き飛ばした時。

彼は自分の代わりに傷を負つたのだ。

フィルデラは自らの愚かさを悔いた。

そして、ルアークを傷つけ、追い詰めている獣に対して、これまで感じたことのない、怒りに似た、昏い感情を抱いた。

これは……なに？

それは、憎しみ。

そう呼ばれる感情であることを、フィルデラは知らなかつた。

「うつ……」

獣の鋭い攻撃を腕に受け、ルアークが短剣を取り落とした。武器を失つたルアークに止めを刺さんと、獣が跳躍する。

「ダメええつ！」

その極限の状況に、フィルデラの中で感情が暴走し、『力』となつてほとばしつた。

ここで、死ぬのか？

間近に獣の姿をした死が、迫つている。

『力』さえまともに使えれば……。

結界は抜けたといつても、ここはまだ光神殿の敷地内である。

闇の恩寵深いルアークの『力』は、ほとんど封じられてしまつている。

だが、ただ死ぬわけにはいかない。

自分が死ねば、次はあの少女が、この獣に引き裂かれるだらう。せめて……相討ちに……。

使えるかぎりの『力』を集めて、闇の刃を造りあげる。

ふふつ……。

今、意識のほとんどを占めるのは、エメラーグでも、母でもなく、
出会つたばかりのあの少女だった。

惹かれて……いる？

自分とは対称的な存在。

光の恩寵深い、美しい少女に。
自分は、惹かれているのだ。

もつと知りたかった。

彼女のこと……。

だが、その願いがかなえられる事はない。
もう終わりなのだ……。

全てをあきらめた瞬間。

まばゆい白光が、獣を襲つた。

圧倒的な光の力。

しかし、自らとは相反するはずのその力に、ルアークは不思議な
暖かさを感じた。

「ルアークさん！」

ほどばしつた『力』が『光』と化し、いままさに、ルアークを引き裂かんとしていた光獣に注がれた。

その光は、破壊のためのもの。

光獣が溶けていく。

どろどろと歪みながら、光獣が溶けていった。
どさり……。

醜く歪んだ光獣の死体が、地に横たわる。

「私……わたし……？」

自分が殺したのだ。

「あつ……ああ……」

自分自身が怖かった。

あの時、確かにファイルデラは光獣の死を願つた。

昏い、これまで感じたことの無いような感情に突き動かされて、

『力』を破壊の光に変え、光獣を殺したのだ。

ファイルデラは呆然と、その場にへたりこんだ。

「ファイルデラ……危ない所を済まなかつた……。おかげで助かつた

よ

ルアークに声をかけられても、ファイルデラは返事を返すことができなかつた。

普通ではないファイルデラの様子に、ルアークは驚いて駆け寄る。

「ファイルデラ…… しつかりしろ」「

ぱしづ……。

軽くほほを叩くと、やつと瞳の焦点があつ。

「ルアークさん。私は……わたしは……」

その瞳に浮かぶのは罪の意識。

彼女は、自分自身におびえているのだ。

「ファイルデラ…… 何におびえている?」

ルアークは、わざと、突き放すようこうこう言つた。

「私は……なぜ、あんなことを……。私は……」

「うわー」とのよびこにつぶやくファイルデラを、ルアークは皮肉げに嘲ける。

「なるほど……俺を助けたことを後悔してゐるつてわけだ……」

「違います! どうして、そんな!」

「そうじゃないか。おまえが“あんなこと”をしなければ俺はあの獣に殺されていたんだぞ。光獣を殺すか、俺を見殺しにするか、あの場面では二者択一だ。そして今、おまえは光獣を殺したことを後悔している。ということは、俺を助けたことを後悔していると、そういう言つことになるんじゃないかな?」

「それは……」

詭弁だ。そう言ひ返そとしてファイルデラはできなかつた。ルアークの言葉は、ある意味においては正しかつたからだ。

だが、やはりそれは詭弁だ。

生き物を殺すのは絶対に許されないことだ。たとえそれ以外に方法がなかつたとしても、そのことを正当化してはならない。

それは、絶対に正しいことだ。

ファイルデラは、その、絶対に正しいはずの自分の感情を、曲解されたことに怒りさえ覚えて、ルアークに反論しようとする。

この時、ファイルデラに少しでも冷静さがあれば、ルアークのその冷たい言葉の裏に、ファイルデラの心が危険な自己嫌惡の罠にはまるのを防ぐ「う」という意図があつたことに気付いただろ？

だが、そのようなルアークの配慮を必要とするほどの今の彼女の心に、そんな余裕があるはずもなく、怒りに流され言葉を紡いだ。

「それは違います！ たとえそれしか方法がなかつたとしても、命を奪うのは絶対に許されないことです。あなたのように、そのことを当然だなんて思うのは間違っています！ 光獣を屠る「う」とした時、あなたがどんな表情をしていたかご存知ですか？ まるで命を奪うこと楽しんでいるかのような、そんな表情でした……あなたは……」

…

それ以上、ファイルデラは言葉を続けることができなかつた。

冷たい……つめたい……感情をなくしたルアークの発する冷氣に、さえぎられたのだ。

「そう……か。俺は、そんな表情をしていたか……。おまえは、そう感じたのか」

「おまえも……おなじか……。

自嘲の笑みを浮かべたルアークの、その苦々しいつぶやきに、感情に流されていたファイルデラは、急速に冷静さを取り戻しつつあつた。

怒りから立ち返ったファイルデラに、乾いた笑いを浮かべて、ルアーケが質問する。

「ファイルデラ。おまえは食事をしたことがあるか？」

唐突なルークの質問に、フィルデラは戸惑いの表情を浮かべて、口を開いた。

「それは……食事をしなければ、生きていけませんから」

フィルデラの返答に、ルークは馬鹿にしたような表情を作つて、言葉を継ぐ。

「それは大変だな。おまえは毎日食事をするたびに、殺された動植物のために、今のように後悔しているのだろうからな。なにしろ、自ら手を下してさえ、これだけ自分を責めているんだ。自らは手を汚さず、罪を他人に委ねている食事のときの悔恨は、想像を絶するものなんだろうな」

「あ……」

単純な、本当に単純な事実。

自分が今、ここにこうして生きているということが、他者の犠牲のうえにあるという事実。

そのことに、フィルデラはまったく気付いていなかつた。

ルークを助けるために、あの光獣の命を奪つたこと。

そして、自らが生き続けるための糧として、動植物の命を奪つこと。

この両者にどんな違いがあるというのだろうか？

いや、ルークの言うとおり、自ら手を下していないぶん、食事をとるときの罪のほうが重いくらいだ。

自分も、あの、神とおなじだ……

絶対的に正しいことなどありえない。ただひとつ、それ自身をのぞいて。

それなのに自分は、自分の中だけでしか通用しない『正しさ』を

振りかざし、ルークを傷つけたのだ。

「ルークさん……」

呼び掛ける……が、何の反応もない。

フィルデラを完全に無視して、ルークは倒した光獣の方に向かおうとする。

「うつ……」

肩の傷がいたむのか、一瞬顔をしかめたルアークに、フィルデラは思わず縋りつく。

「ルアークさん！」

拒絶される……と思った、せめてそうして欲しかった。

だがルアークは、何の感情も表情に宿さず、フィルデラに顔を向けさえしなかつた。

フィルデラは、くじけそうになる心を叱咤して魔法を発動し、彼の傷を癒す。

しかしルアークは、何事もなかつたかのようにフィルデラを無視し、静かに立ち上がつた。

そして、取り落とした短剣を拾い、傍らに転がっている、フィルデラの発した光線に灼かれて醜く歪んだ光獣の死体を、短剣で突いた。

いつたい何を！

後を追いかけてフィルデラは、その行為の理由を知つた。

その獣は、まだ死に切れずに苦しんでいたのだ。

……ありがとう……。

ルアークに感謝を捧げ、魂が去つていく。

その魂に奇妙な歪みを感じて、フィルデラは思わず問い合わせていた。

「この歪みは……なに？」

去りかけていた魂が、フィルデラに思念を返す。

大きな、おおきな光に満ちた存在。

光獣の、その存在に対する凄まじい怒りの波動が、フィルデラをおそう。

それが……それが、あなたを歪めたの？

肯定……予想どおりの肯定。

そして光獣は、フィルデラにも感謝の念を返した。

それを言葉に直せば以下のように訳すことができる。

あなたの光は暖かかった……開放してくれてありがとう……と。自らを傷つけたファイルデラに対して、感謝の念を返したのだ。消えゆく魂を見送るファイルデラの中に、神に対する新たな怒りがわきあがる。

こんな……こんなことつて！

破壊の光を暖かく感じるほどの苦しみ。

それはいったい、どのようなものなのだろう？

怒りは臨界点を越え、闇い何かを伴つて、ある感情へと進化した。これは……この感情は……。

それは、さつき光獣に対して抱いた、負の感情と同じものだつた。それは、憎しみ。

いまファイルデラは、初めてその感情の意味を理解した。

神が憎かった。

このようなむごいに行いを見せ付けられて、そう思わずにはいられなかつた。

ファイルデラは気付いた。

あの時、ルアークの凄惨な表情の裏に、存在していた感情に。

ルアークさんも……憎んだんだわ。

いえ……ずっと、憎み続けて来たんだわ……。

これは負の感情。

昏い感情。

だが、これは人としてあるために、必要なものだ。否定することはできない。

そのことにいま、ファイルデラは気付いた。

「ルアークさん……」

呼び掛ける……が、荷物をまとめるルアークに反応はない。しかし、ファイルデラは構わず、言葉を続けた。

「ルアークさん、すいませんでした。私は……浅薄でした。あなたに、軽蔑されても仕方ないと思います。ですけど……あなたと同様に、私も神を許すことができません。そして、そんな神に仕えていた、

自分自身を許すことができないんです。ルアークさん、お願ひです。私にその罪をつぐなう機会を与えてください。そして、今、重ねたばかりの、あなたに対する罪に対しても……。お願ひします

「反応は期待していなかつた。

だが、ルアークは振り向いた。

相変わらず無表情だが、とにかく振り向いてはくれたのだ。

「こいつを托されたのはおまえだらう？ それなら、最後まで責任はもて」

ぶつきらぼうこそう言つて、竜の卵の入つた背負い袋を、ルアークはフィルデラに返した。

それつきり、何も言わず無言で歩き去つていく。

フィルデラは静かに、その後を追いかけて行つた。

既に峠を越え、東の海が見える所まで進んでいる。水平線が、白み始めていた。

まもなく、朝が訪れる。

ルアークは、ちらりと、横目で後ろを振り返つた。一晩中歩き続けているのだ。

疲れているだろうに……彼女は何の不平も言わない。

どうして、おまえは……。

いや……どうして……俺は……。

裏切られた……と思つた。

だが、裏切つたのは、自分の方だつたのだ。

彼女は確かにルアークを傷つけた。

彼女に惹かれはじめていたルアークは、彼女を理想化し、無邪気に、彼女が自分の全てを受け止めてくれるものと信じていた。

その、勝手な理想を崩されて、ルアークは傷ついた。

命を奪うことを楽しんでいるような表情をしていた……と。

彼女はそう言つた。

あの時、ルアークのほとんどを止めていたのは、神への怒りだつた。

しかし、自分の中に、少し、ほんの少しだが、殺戮を楽しむ感情があつたことに、ルアークは気付かされた。

そして、そのことをごまかすために、自分はさも正しいかのように、彼女のちょっととした間違いを責めたてたのだ。

過剰防衛……だ。

自分の言葉がどれだけの打撃を彼女に与えたか。

ルアークは気付いていた。彼女の心があげた悲鳴に。

だが、あの時の自分は、彼女の心が傷つくことに、喜びを感じてさえいたのだ。

それなのに彼女は、そんなルアークの苦し紛れの皮肉を真剣に受け止め、ひたすら自分だけを責め続けている。

俺は卑怯だ……。

そうやって、彼女が苦しんでいるのに気付いていても、自分の過ちに気付いていても、ルアークは何も知らないふりをした。

彼女の苦しみに気付きながら、ルアークは何もしなかつたのだ。

そのとき、どさり……と、後ろで音がした。

振り向くと。

体力の限界に達したフィルデラが、地に横たわつていた。

卑怯なだけではない……。

本当に自分は情けない……なんと情けない男なのだう……。

彼女が、疲れているのを知りながら、気付きながら。

歩みを緩めることもなく、フィルデラにとつては、明らかにオーバーペースで歩き続けたのだ。

「ごめんなさい……ルアークさん、ごめんなさい」

朦朧とした意識の中でひたすら謝る少女に、ルアークは水筒を差し出した。

「飲め……」

のどに水を流し込み、一息ついて、ファイルテラは悲しげにうつむいた。

「すいません……。ルアークさんに『迷惑をおかけして……。足手まといになってしまって……』

「そう自覚があるのなら、せめて倒れる前に言つて欲しかったな。無理をして、結局こうことになつて、余計に足を引っ張ることになる」

おまえは何も悪くない……。悪いのは俺だ……。

そう思つ心とは裏腹に、口をついて出たのは冷たい言葉だつた。紡がれた言葉は刃となつて、彼女の心に突き刺さる。

「『めんなさい』。本当に……『めんなさい』なにを、謝る必要があるといつのだろつか？

悪いのは自分だ。

彼女にとつて峠越えがきつことは、最初から解りきつていたのだ。

だから、荷物の分担とペース配分に気を付けてやれば、何の問題もなかつたはずだ。

それを解つていて、ルアークはわざと彼女を無視したのだ。
本当に……どうしようもないな……俺は。

自嘲してルアークは言葉を紡いだ。

「まあ、済んでしまつたことは仕方ない……。次から気をつければいい。どうせ、そろそろ休憩を取らねばならなかつたんだ。食事にしよう……。立てるか？」

なにを、かつこつけているんだ？

いかにも傷ついた彼女を許してやるといつ風を裝つて、ルアークはファイルテラに手を差し出した。

そんな自分を、ルアークはさらに嫌悪した。

自分に向けられた彼女の笑みが、心に突き刺さつた。

完全に嫌われてしまつた……と思つていた。

目の前に差し出された腕が信じられない。

彼は、優しい表情で自分を見ている。

ファイルデラは、ゆっくりとその腕を取つた。

力強い腕に引かれて立ち上がってみると、まだ足がぐらつく。

だがルアークが、しっかりと支えてくれた。

「ルアークさん……」

それだけで、たつたそれだけで、傷ついた心が癒されていくのを、
ファイルデラは感じていた。

岩場の陰、平らになつた大きな岩の上に、ふたりは腰をおろした。
ルアークは自分の背負い袋をあらすと、塩漬け干肉と、乾麦、そ
して干果を取り出した。

「火は使えないから、このままで我慢して欲しい。食欲がないかも
しれないが、食べなければさらに体力を失うことになる。口にあう
とは思えないが我慢して食べるんだ」

ファイルデラはうなずいて、沢水で洗つて塩を抜いた干肉を受け取
り、口に入れた。

塩辛い……が、疲れたファイルデラにはその辛さが心地好かつた。
だが、固い肉をよく噛んで、飲み込もうとしたとき……。

「うつ……」

胸がねじれるような吐き気が、ファイルデラを襲つた。

「はあ……はあ……うふふ……」
「げぼ……」

吐くものなどないといつのこと……。

自らを責めるように、ファイルデラは苦い液体を絞り出し続けた。

「ファイルデラ……」

これは肉体的なものではない、精神的なものだ。

ファイルデラの“ここいら”がふるえていた。

ルークは、昨夜自分がファイルデラに放った言葉を思い出していた。

あの言葉はファイルデラに、生きるために必ず罪が伴つことを、気付かせてしまったのだ。

そして、纖細なファイルデラの心は、他者を犠牲にしてまで、生き続けることを望まなかつたのだろう。

俺の……せいだ……。

俺が、あんなことさえ言わなければ。

彼女は、自らの罪に気付くことなく……。

いや……それではだめだ

彼女は気付かねばならなかつた。

『生きていいくこと』がはらむ罪に、気付かなければならなかつたのだ。

ルークは思い出した。

エメラークに拾われて、はじめて狩りをした時のこと。

はじめて、他者の命を奪つた時のこと。

あの時自分は、自ら手を下し命を絶つたウサギの肉を口にして、今のファイルデラのように嘔吐した。

あの時のエメラークの怒りは忘れることができない。

逃げるな……と、彼女は言った。

罪から逃げるな……と。

それに立ち向かえ……と。

ファイルデラも乗り越えなければならないのだ。

生とともににある罪を、乗り越えなければならないのだ。

「落ち着いたか？」

ルークは、できるだけ冷たい口調を装つて、ファイルデラに話しかけた。

その冷たさを感じ取り、ファイルデラはまつげを伏せる。

「ルアークさん……私、わたし……」

ルアークは、口^一もつたフィルデラをさらに突き放し、皮肉の刃をあびせる。

「いい気なものだな。逃げればそれで許されるとでも思つていいのか？ 考えてみる。すべての生命は、生きるために罪を負う。だがそれでも、生きてゆかねばならないんだ。自分の罪から目をそらすな！ おまえは気付いていないのか？ 逃げることこそ、最大の罪だということに。おまえは卑怯者だ。生をうけこの世に存在する以上、おまえには生き抜く義務がある。ここでそれを放棄するなら、これまでおまえが生きるために命を絶たれたものたちに、どう言い訳するつもりだ？ もう一度言つ。おまえは卑怯者だ！ おまえの罪の償いとは、逃げることなのか？」

そう言つてルアークは、うつむいたフィルデラに水筒を差し出し、口をすすぐせる。

そしてもう一度、干肉を切り分けると、フィルデラに押し付けた。「食べるんだ」

フィルデラは、決然とした表情でルアークを見返し、干肉を口に押し込んだ。

固い肉をゆつくりと咀嚼し、心を決めて飲み込む。

「うつ……」「じくん……。

吐き気をこらえながらも、フィルデラは新たな一步を踏み出すことができたのだ。

結果的に、あくまで結果的にではあるが、ルアークのとつた態度は正しかつた。

自己の存在基盤を失つた彼女には、中途半端な優しさではなく、厳しく接することが必要だったのだ。

彼女自身が、新たな土台を、自らの心に造りあげる必要があつた

のだ。

「もう、大丈夫だな？」

「そうたずねると、フィルデラはこくんと小さくうなずく。

「はい……私、自分がどれだけの罪を背負っているか、そのことに全く気付いてなかつたんですね。もう逃げたりはしません。自らの罪に、そして、神の罪に、立ち向かって行きたいと思います」

そう言つてフィルデラは、澄んだ瞳に絶対的な信頼を浮かべて、ルアークを見つめた。

誤解だ……。

フィルデラは、ルアークが彼女のために厳しい態度を取つたのだと誤解しているのだ。

そうではない、違うのだ。

結果的に彼女のためになつたとはいえ、ルアークは彼女を思いやつて、そんな態度をとつたのではない。

彼女の心の清澄さに、自分の心の汚さを認識させられて、それをごまかすために、あのよくな態度をとつたのだ。

決して自分は、彼女にこのような視線を受けるにふさわしい人間では、あり得ないのだ。

しかし……。

そう、解つていながらも、ルアークはフィルデラを、そして自らを偽らずにはいられなかつた。

怖かつた。

彼女に自分のちっぽけな本性を悟られるのが、本当に怖かつたのだ。

だから、ルアークは演技した。

いかにも、すべて解つていたといふような笑みを浮かべて、彼女に微笑みかける自分が、心底から情けなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8505z/>

光と闇のはざまに

2011年12月27日22時50分発行